国立大学法人佐賀大学　令和３年度研究報告書

研究成果（概要）

各教科等における言語能力やその育成方法の整理と，それらを基にするアカデミック・ライティングの指導を中心とした取り組みの実施
・各教科等で大切にしてきた「読解力」「言語能力」の育成方法を用い，その指導方法と指導過程を児童の姿を基に整理する。
・各教科等における「言語能力」の育成方法を基に，そこで用いる様々なツールと，思考スキルとを組み合わせた上でのアカデミック・ライティング指導を発達の段階に応じて計画し，実践化する。

１．研究課題と調査・取組内容

（１）具体的な研究課題

各教科等における言語能力やその育成方法について整理し，それらを基にするアカデミック・ライティングの指導を中心とした取り組みを実施し，その効果を検証する。

（２）研究課題に基づいて実施した調査・取組内容

本研究では主に以下の５点について取組を行った。
ア）各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化
イ）「言語能力」を統合して解決する場の設定
ウ）アカデミック・ライティング指導の計画と実践
エ）「言語能力」育成状況の多面的測定
オ）「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

ア）各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化

各教科等で大切にしてきた「読解力」「言語能力」の育成方法を用い，その指導方法と指導過程を児童の姿を基に整理し，明確化した。さらに，各教科等における，特有の言語能力の育成という点からの整理を行った。

イ）「言語能力」を統合して解決する場の設定

各教科等における，固有の言語能力の育成を図った上で，各教科等で散在している「言語能力」を統合して解決する場を設けた。従前の研究で取り組んできた，思考スキル（「比較する」「関連付ける」「理由づける」「構造化する」「評価する」）を各教科等との研究と組み合わせ，各教科等での「読解力」「言語能力」をつなぐものとしての「思考力」指導の在り方について，実践を踏まえて明らかにした。

ウ）アカデミック・ライティング指導の計画と実践

各教科等における「言語能力」の育成方法を基に，そこで用いる様々なツールと，思考スキルとを組み合わせた上でのアカデミック･ライティング指導を発達の段階に応じて計画し，実践化した。その指導にあたっては，「仮説を立て，調査を通して得られた情報を分析し，論理的に結論を導く考え方を身に付け,自己の生き方を考えることができるようにしていく」学習過程を経ることができるよう生活科及び総合的な学習の時間を中心に行った。

エ）「言語能力」育成状況の多面的測定

児童の「言語能力」の向上を測るための取組を複数行った。１つ目は，学力の到達度を測る「標準学力検査ＣＲＴ／目標基準準拠検査」であり，２つ目は「ＮＩＮＯ認知能力検査」であり，３つ目が，「読書力診断検査」である（いずれも図書文化社）。いずれも，量的なデータが得られるものである。さらに，「言語能力」が，提示／解答方法によって影響するかどうかを測るために，同一問題を異なる提示／解答方法（ＩＣＴ利活用での提示／解答群・紙面での問題提示／解答群・ＩＣＴでの問題提示／紙面解答群）による独自の調査を行った。その際，特に「情報処理能力」に主眼を置き，この調査を経る中で，紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測った。また，アカデミック・ライティングの成果を評価するための指標となる問題を作成した。アカデミック・ライティングで指導可能な言語能力として次の①から④が挙げられる。

①情報の読み取り，②情報の比較読み取り，③読み取った情報を基に自分の意見を表現 ④仮説を立てる力

これらを評価する際，目的や必要に応じて資料を選択し，考えを記述することができているかという視点で国語，算数，社会，理科の４教科に関する問題を作成（言語能力に関する検査①）することに加え，教科の枠を取り払い，言語能力を総合的に見ることができる問題を作成（言語能力に関する検査②）して実施することにより，年間の指導を経ての変化を調査した。

オ）「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のような検討を経て得られた知見を，授業改善に反映させることができるように教員間で共有した。そしてどのように取り入れ，実践したのかという点を，読解力などの言語能力等育成のための取組という観点で実践報告にまとめ，冊子を作成した。作成した冊子は，全県下の小学校に配布を行う。さらにそのフィードバックを得る中で，更なる改善を図っていく。

２．効果検証内容・結果

（１）効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	標準学力検査ＣＲＴ ／目標基準準拠検査	株式会社 図書文化社	基本的な学力の到達状況を測定し，全国平均との比較を行う。さらに経年的な結果と比較し，本研究の有効性について検討を行う。
2	ＮＩＮＯ 認知能力検査	株式会社 図書文化社	児童の認知能力についての検査を研究前後で比較し，研究を検証する。
3	読書力診断検査	株式会社 図書文化社	児童の読書力についての検査を研究前後で比較し，研究を検証する。
4	言語能力に関する検査①②②	佐賀大学教育学部附属小学校	①同一問題で提示／解答方法が異なる検査を設定する。「言語能力」と共に，紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。②アカデミック・ライティングの指導に関する検査を研究前後で比較し，研究を検証する。
5	保護者へのアンケート調査	佐賀大学教育学部附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証

			する。
6	児童への聞き取り調査	佐賀大学教育学部附属小学校	言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
7	公立学校教員へのアンケート調査	佐賀大学教育学部附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。

（２）指標に関するデータの取得方法（時期，回数等）

No	検証のための指標	データ取得の時期，回数等
1	標準学力検査ＣＲＴ／目標基準準拠検査	令和４年１月，令和５年１月にそれぞれ１回ずつ，全校児童に対して学力検査を実施する。
2	ＮＩＮＯ認知能力検査	令和３年６月（研究開始前）と令和４年 12 月（研究開始 1 年経過後）とで実施し，認知能力としての変化を測る。
3	読書力診断検査	令和３年６月（研究開始前）と令和４年 12 月（研究開始 1 年経過後）とで実施し，読書力としての変化を測る。
4	言語能力に関する検査①②	令和３年６月（研究開始前）と令和４年２月，令和４年５月，令和４年 12 月と合計４回で実施し，言語能力に関する変化を観察する。
5	保護者へのアンケート調査	９月以降から令和５年３月までの１年６か月の間に２回，生活科及び総合的な学習の時間で得られた児童の成果物についての保護者アンケートを実施する。または，授業参観後にアンケートを実施する。

（３）検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
佐賀大学教育学部附属小学校 各学年 １組・２組・３組	なし	本研究においては，附属小学校の各学年のクラス１組・２組・３組をそれぞれ比較対象として設定した研究を進める。 各クラスの担任が担当する教科等で重視する言語能力育成のための指導方法を明確にした上で指導を行い，共通に指導するアカデミック・ライティングの手立てを基に，講じた指導方法と結果を比較検討する。
計１校	計０校	

３．考察（本研究が学力向上のために有効な取組であると言えるか）

本研究では，学力向上のため基盤となる読解力などの言語能力等を育成することを目的として，実践を行ってきた。その内容は大きく次の２点である。

（１）各教科等における言語能力の育成方法の明確化
（２）アカデミック・ライティングの指導の計画と実践

まずは各教科等における言語能力の整理を行った。発達段階に応じた言語能力とその育成方法を明確にし，各教科等がそれぞれの発達段階において，どのような方法で言語能力を育んできたかを共有できるようにするためである。各教科等における言語能力を整理したことで，各

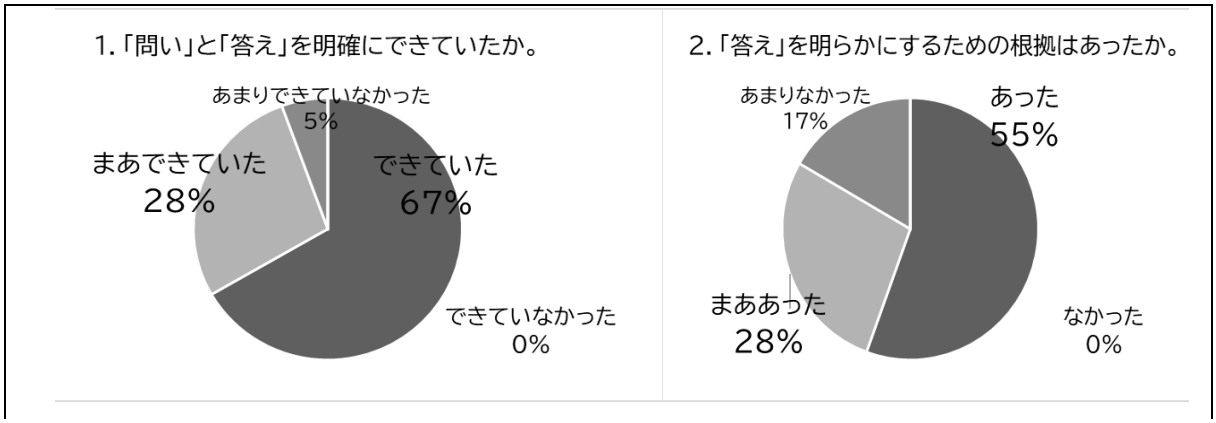
教科等において育成を得意としている言語能力，教科特有の言語能力，各教科等に共通している言語能力など，言語能力を俯瞰して捉えるきっかけとなったことで，教科横断的な視点をもつことにつながった。ここで整理したものを「言語能力を構成する資質・能力」にあてはめ，各教科等において育成を得意としている言語能力，教科特有の言語能力，各教科等に共通している言語能力など，言語能力を教科の枠組みを超えて捉えることができるようにし，指導モデルの作成や，指導を行う際の手立てとして取り入れた。

次に行ったのがアカデミック・ライティングの指導の計画と実践である。各教科等で育成してきた言語能力を関連付け，各教科等の枠組みを超えた言語能力の育成を図るために「鯱っ子学習」を設定した。この鯱っ子学習は，各教科等の学習を通して身に付けた言語能力を統合して発揮する場という位置づけである。アカデミック・ライティングの指導は国語科における言語活動とは異なるものであり，読解（input）した情報をどのような手順で表現（output）していくのかを指導し，各教科等で育成してきた言語能力を，より現実の文脈に沿って働かせることができるようにした。

どの教科でどのような指導をしているのかを知り，教員だけでなく，児童が活用している言語能力を自覚できるようにすることで「各教科等で身に付けた資質・能力を，目的に応じて用いることができる児童」や「身に付けた資質・能力を，汎用的(教科横断的)なものとして柔軟に用いることができる児童」の実現につなげていくことができたのではないかと考える。

実践後に行った，「言語能力を統合して解決する問題①②」の検査においては，アカデミック・ライティングにおいて指導可能な言語能力として設定した項目（①情報を読み取る力②情報を比較し，読み取る力③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力④仮説を立てる力）においては一定の伸びが確認された。特に低・中学年の伸びは著しいものであった。大きな伸びが表れた項目は，③と④についてである。記述において，自分の意見に対する根拠を明らかにして述べることができている児童が大幅に増えている。その根拠となるものを資料から適切に引用することができる児童も増加した。高学年においては，明確な答えがない問いに対して仮説を立て，問題解決のためにどのような情報を収集する必要があるのかを考え，適切に述べることができる児童が増加している。これらは，アカデミック・ライティング指導において，自分のテーマに対して問いを立て，必要な情報を集めるという経験を積んできたことが要因の一つであると考えらえる。

以下は現時点で回収できている保護者アンケートの結果である。



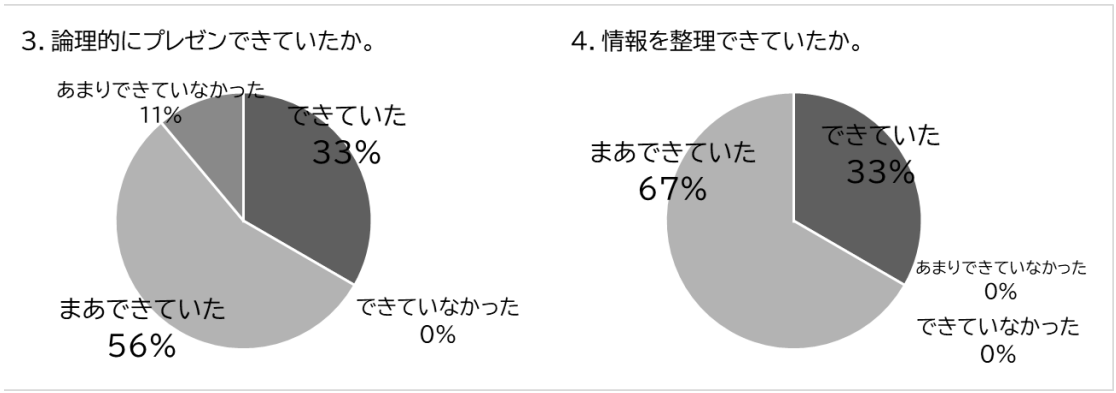
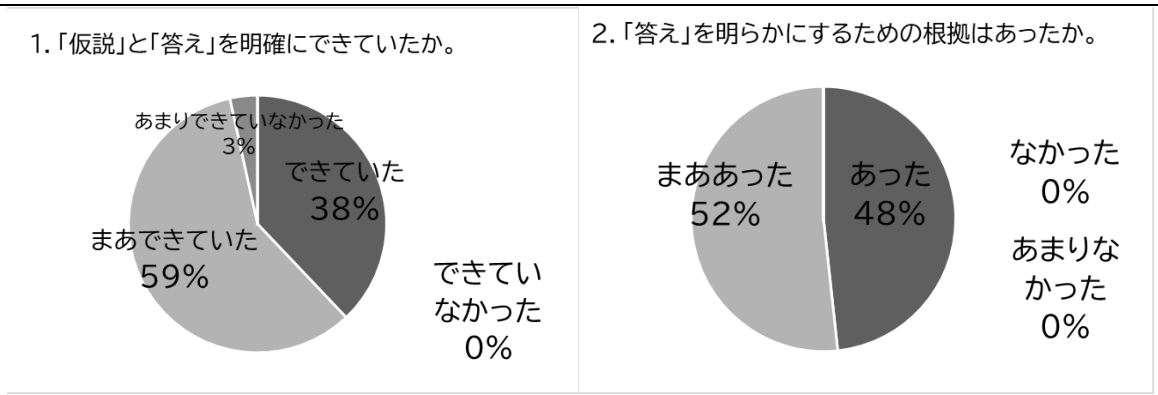


表１　４年生における保護者アンケート結果



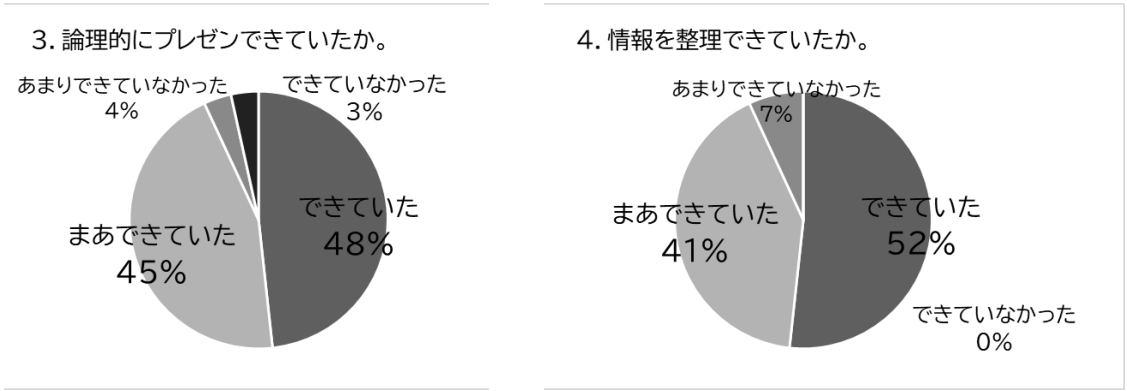


表２　５年生における保護者アンケート結果

・「２．『答え』を明らかにするための根拠はあったか。」「３．論理的にプレゼンできていたか。」「４．情報を整理できていたか」のアンケート項目を比較すると，５年生が「できていた（あった）」という保護者からの回答の割合が多いことが分かる。上学年になると，各教科等で身に付けている資質・能力を用いて論理的に思考し，成果物の内容の質も高まっていることが分かる。

・「５．どんな力が発揮されていたか。」というアンケート項目では，様々な社会で生きて働くであろう力が発揮されていることを保護者が感じていることが分かる。主に，「まとめ・表現」の姿から「情報を整理する力」と「プレゼンする力」の２つの力を挙げていることが分かる。「情報を整理する力」は「整理・分析」に関わるものであり，「プレゼンする力」は「まとめ・表現」におけるものであると考える。「情報を整理する力」として，保護者が挙げている「昔と現在を比較する力，ぱっと見て引きつける力」や「伝えたい内容を図・写真で補完する力。文字，写真が見やすく，理解しやすい流れで配置する力」は図画工作科，

「ぱっと見て分かるようにグラフ化する力」は算数科など各教科等で身に付けた資質・能力が発揮されている。「プレゼンする力」として，保護者が挙げている「問いかけるように話す」「聞く人にいかにして伝えるかを思考する力」「聞く人をひきつけるための表現力」は国語科などの教科で身に付けた資質・能力が発揮されていると考える。

・「６．鯱っ子学習」に対して，ご感想やご意見などお聞かせください。」のアンケート項目では，「将来の仕事につながるので，こういう機会を増やしてほしい。」「こんなに本格的なプレゼンができるとは！ビックリしました。」というような肯定的に捉えた回答が多くみられた。また，「情報の出典がインターネットに偏っていたことが気になりました。疑問に思った時，ついつい手軽なインターネットにたよってしまいますが，新聞や本を活用し，ことばの力も同時に育つともっと良いなと思いました。」というような指導していく必要がある点についても回答もあり，今後の課題であると考える。

　このように，言語能力の育成につながっていることが読み取られる回答が多く見られた。本校の取組である「鯱っ子学習」を続けていくことで，さらに言語能力の育成を図ることができるのではないかと考える。

４．課題と今後の研究の方向

・今年度は，各担任が各々アカデミック・ライティング指導モデルに則った指導を行ってきた。そのため，手立てについては担任の裁量によるものが大きかった。今年度の取組後には，有効だと感じた手立てを児童の姿とともに表に整理してまとめている。今後，発達段階に応じた有効な手立てを精選し，アカデミック・ライティング指導の改善を図る。

・各教科等で育成してきた言語能力を統合して解決する場（鯱っ子学習）を設定し，アカデミック・ライティング指導を交えて実践を行ってきた。今後も実践を重ね，児童が言語能力を発揮する具体的な場面や育成方法，その基盤づくりについて明らかにしていく。そのために，次年度は各学年，各教科等での学びと鯱っ子学習との関わりについて図に整理し，アカデミック・ライティング指導に取り入れていく。図を活用することで，これまでに学習してきた言語能力をどのように発揮しているのかを教員が把握できるようにすることをねらう。さらに，児童自身が発揮した言語能力を自覚できるようにしたり，言語能力を発揮するための参考にしたりできるようにすることで，より汎用的なものとしていき，さらなる言語能力の育成を図る。

・取組開始前の６月に，ＮＩＮＯ認知能力検査，読書力診断検査を実施した。また，１月には標準学力検査ＣＲＴも実施し，量的なデータが得られる検査を複数実施してきた。次年度に再度実施し，その比較によって児童の言語能力の育成状況を測定することができると考える。

５．今年度の研究経過

月	内容
令和３年 ４月	令和３年４月　保護者への説明 「言語能力」を統合して解決する場の構想・問題作成
令和３年 ５月	文部科学省における連絡協議会
令和３年 ６月	「言語能力」を統合して解決する問題の実施 ＮＩＮＯ認知能力検査／読書力診断検査の実施
令和３年 ７月	学力向上推進協議会（第１回）開催
令和３年 ８月	各教科等における「言語能力」の育成方法の明確化 アカデミック・ライティング指導の計画
令和３年	取組開始

９月	
令和３年 11 月	研究発表会の実施 学力向上推進協議会（第２回）開催 公立学校教員へのアンケート（第１回）
令和４年 １月	児童への聞き取り調査 ＣＲテストの実施
令和４年 ２月	「言語能力」を統合して解決する問題の実施
令和４年 ３月	実践事例集の作成及び配布 学力向上推進協議会（第３回）開催 アカデミック・ライティング指導の改善・検討

６．研究関係者

（１）学力向上推進協議会構成メンバー

所属	氏名
佐賀大学アドミッションセンター長	西郡　大
佐賀大学教育学部　準教授	井邑　智哉
佐賀大学教育学部　準教授	竜田　徹
佐賀県教育委員会	牟田　清敬
佐賀大学教育学部附属小学校評議員	村岡　智彦
佐賀大学教育学部附属小学校育友会　副会長	古川　誠一
佐賀大学教育学部　統括長	今井　治人
佐賀大学教育学部附属小学校　校長	豆田　幸彦
佐賀大学教育学部附属小学校　教頭	岩﨑　稔敦
佐賀大学教育学部附属小学校　教務	福田　修
佐賀大学教育学部附属小学校　研究主任	森田　祐介
佐賀大学教育学部附属小学校　事業担当者	廣瀬　圭吾

（２）その他関係者

所属	氏名
特になし	